

妙法蓮華經。譬諭品。第三

爾の時に舍利弗、踊躍歡喜して即ち起つて合掌し、尊顔を瞻仰して佛に白して言さく、

今世尊に従いたてまつりて、此の法音を聞いて心に踊躍を懷き、未曾有なることを得たり。所以は何ん、我昔佛に従いたてまつりて是の如き法を聞き、諸の菩薩の受記作佛を見しかども、而も我等は斯の事に預らず。甚だ自ら如來の無量の知見を失えることを感傷しき。

世尊、我常に獨り山林樹下に處して、若しは坐し若しは行じて毎に是の念を作しき、我等も同じく法性に入れり、云何ぞ如來小乗の法を以て濟度せらると。是れ我等が咎なり、世尊に非ず。所以は何ん、若し我等、所因の阿耨多羅三藐三菩提を成就することを説きたもうを待たば、必ず大乘を以て度脱せらるることを得ん。然るに我等方便隨宜の所説を解らずして、初め佛法を聞いて遇便ち信受し、思惟して證を取れり。

世尊、我昔より來、終日竟夜毎に自ら剋責しき。而るに今佛に従いたてまつりて、未だ聞かざる所の未曾有の法を聞いて諸の疑悔を斷じ、身意泰然として快く安穩なることを得たり。今日乃ち知んぬ。眞に是れ佛子なり。佛口より生じ法化より生じて、佛法の分を得たり。

爾の時に舍利弗、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言さく

我是の法音を聞いて 未曾有なる所を得て

心に大歡喜を懷き 疑網皆已に除こりぬ

昔より來 佛教を蒙つて 大乘を失わず

佛の音は甚だ希有にして 能く衆生の惱を除きたもう

我已に漏盡を得れども 聞いて亦憂惱を除く

我山谷に處し 或は林樹の下に在つて

若しは坐し若しは經行して 常に是の事を思惟し

嗚呼して深く自ら責めき 云何ぞ而も自ら欺ける

我等も亦佛子にして 同じく無漏の法に入れども

未來に無上道を演説すること能わず

金色三十二 十力 諸の解脱

同じく共に一法の中にして 此の事を得ず

八十種の妙好 十八不共の法

是の如き等の功德 而も我皆已に失えり

我獨經行せし時 佛大衆に在して

名聞十方に満ち 廣く衆生を饒益したもうを見て

自ら惟わく此の利を失えり 我爲れ自ら欺誑せりと

我常に日夜に 毎に是の事を思惟して

以て世尊に問いたてまつらんと欲す

爲めて失えりや爲めて失わずや

我常に世尊を見たてまつるに 諸の菩薩を稱讚したもう

是を以て日夜に 此の如き事を等量しき

今佛の音聲を聞きたてまつるに

宜しきに隨つて法を説きたまえり

無漏は思議し難し 衆をして道場に至らしむ

我本邪見に著して 諸の梵志の師と爲りき

世尊我が心を知しめして

邪を抜き涅槃を説きたまいしかば

我悉く邪見を除いて 空法に於て證を得たり

爾の時に心に自ら謂いき 滅度に至ることを得たりと

而るに今乃ち自ら覺りぬ 是れ實の滅度に非ず

若し作佛することを得ん時は 三十二相を具し

天・人・夜叉衆 龍神等恭敬せん

是の時乃ち謂うべし 永く盡滅して餘なしと

佛大衆の中に於て 我當に作佛すべしと説きたもう

是の如き法音を聞きたてまつりて 疑悔悉く已に除こりぬ

初め佛の所説を聞いて 心中大に驚疑しき

將に魔の佛と作つて 我が心を惱亂するに非ずやと

佛種種の縁 譬諭を以て巧みに言説したもう

其の心安きこと海の如し 我聞いて疑網斷じぬ

佛説きたまわく過去世の 無量の滅度の佛も

方便の中に安住して 亦皆是の法を説きたまえり

現在未來の佛 其の數量りあること無きも

亦諸の方便を以て 是の如き法を演説したもう

今者の世尊の如きも 生じたまいし従り及び出家し

得道し法輪を轉じたもうまで 亦方便を以て説きたもう

世尊は實道を説きたもう 波旬は此の事無し

是を以て我定めて知んぬ 是れ魔の佛と作るには非ず

我疑網に墮するが故に 是れ魔の所爲と謂えり

佛の柔輒の音 深遠に甚だ微妙にして

清淨の法を演暢したもうを聞いて 我が心大に歡喜し

疑悔永く已に盡き 實智の中に安住す

我定めて當に作佛して 天・人に敬わるることを爲

無上の法輪を轉じて 諸の菩薩を教化すべし

爾の時に佛、舍利弗に告げたまわく、

吾今天・人・沙門・婆羅門等の大衆の中に於て説く。我昔曾

て二萬億の佛の所に於て、無上道の爲の故に常に汝を教化

す。汝亦長夜に我に隨つて受學しき。我方便を以て汝を引導

せしが故に、我が法の中に生ぜり。

舍利弗、我昔汝をして佛道を志願せしめき。汝今悉く忘れて、便ち自ら已に滅度を得たりと謂えり。我今還つて汝をして本願所行の道を憶念せしめんと欲するが故に、諸の聲聞の爲に是の大乗經の妙法蓮華・教菩薩法・佛所護念と名くるを説く。

舍利弗、汝未來世に於て、無量無邊不可思議劫を過ぎて、若干千萬億の佛を供養し、正法を奉持し菩薩所行の道を具足して、當に作佛することを得べし。號を華光如來・應供・正徧知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊といい、國を離垢と名けん。其の土平正にして清淨嚴飾に、安穩豐樂にして天・人熾盛ならん。瑠璃を地となして、八つの交道あり。黄金を繩と爲して以て其の側を界い、其の傍に各七寶の行樹あつて、常に華果あらん。

華光如來亦三乘を以て衆生を教化せん。舍利弗、彼の佛出でたまわん時は惡世に非ずと雖も、本願を以ての故に三乗の法を説かん。其の劫を大寶莊嚴と名けん。何が故に名けて大寶莊嚴という、其の國の中には菩薩を以て大寶と爲すが故なり。彼の諸の菩薩、無量無邊不可思議にして、算數譬諭も及ぶこと能わざる所ならん。佛の智力に非ずんば能く知る者なけん。若し行かんと欲する時は寶華足を承く。此の諸の菩薩は、初めて意を發せるに非ず。皆久しく徳本を植えて、無量百千萬億の佛の所に於て淨く梵行を修し、恒に諸佛に稱歎せらるることを爲、常に佛慧を修し大神通を具し、善く一切諸法の門を知り、質直無偽にして志念堅固ならん。是の如き菩薩其の國に充滿せん。舍利弗、華光佛は壽十二小劫ならん。王子と爲て未だ作佛せざる時をば除く。其の國の人民は壽八小劫ならん。

華光如來十二小劫を過ぎて、堅滿菩薩に阿耨多羅三藐三菩提の
記を授け、諸の比丘に告げん、

是の堅滿菩薩次に當に作佛すべし、號を華足安行・
多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀といわん。其の佛の國土も亦
復是の如くならん。

舍利弗、是の華光佛の滅度の後、正法世に住すること三十二
小劫、像法世に住すること亦三十二小劫ならん。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて
言わく、

舍利弗來世に 佛普智尊と成つて

號を名けて華光といわん 當に無量の衆を度すべし

無數の佛を供養し 菩薩の行

十力等の功德を具足して 無上道を證せん

無量劫を過ぎ已つて 劫を大寶嚴と名け

世界を離垢と名けん 清淨にして瑕穢なく

瑠璃を以て地と爲し 金繩其の道を界い

七寶雜色の樹に 常に華果實あらん

彼の國の諸の菩薩 志念常に堅固にして

神通・波羅蜜 皆已に悉く具足し

無數の佛の所に於て 善く菩薩の道を學せん

是の如き等の大士 華光佛の所化ならん

佛王子たらん時 國を棄て世の榮を捨てて

最最後の身に於て 出家して佛道を成ぜん

華光佛世に住する 壽十二小劫

其の國の人民衆は 壽命八小劫ならん

佛の滅度の後 正法世に住すること
三十二小劫 廣く諸の衆生を度せん

正法滅盡し已つて 像法三十二

舍利廣く流布して 天・人普く供養せん

華光佛の所爲 其の事皆是の如し

其の兩足聖尊 最勝にして倫匹なけん

彼即ち是れ汝が身なり 宜しく應に自ら欣慶すべし

爾の時に四部の衆・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・天・龍

・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽等の大衆、

舍利弗の佛前に於て阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるを見て、

心大に歡喜し踊躍すること無量なり。各各に身に著たる所の

上衣を脱いで以て佛に供養す。釋提桓因、梵天王等、無數の

天子と、亦天の妙衣・天の曼陀羅華・摩訶曼陀羅華等を以て佛

に供養す。所散の天衣、虛空の中に住して自ら回轉す。諸天の

伎樂百千萬種、虛空の中に於て一時に俱に作し、衆の天華を雨

らして是の言を作さく、

佛昔波羅奈に於て初めて法輪を轉じ、今乃ち復無上最大の

法輪を轉じたもう。

爾の時に諸の天子、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説

いて言さく

昔波羅奈に於て 四諦の法輪を轉じ

分別して諸法 五衆の生滅を説き

今復最妙 無上の大法輪を轉じたもう

是の法は甚だ深奥にして 能く信ずる者あること少し

我等昔より來 數世尊の説を聞きたてまつるに

未だ曾て是の如き 深妙の上法を聞かず

世尊是の法を説きたもうに 我等皆隨喜す

大智舍利弗 今尊記を受くることを得たり

我等亦是の如く 必ず當に作佛して

一切世間に於て 最尊にして上あることなきことを得べし

佛道は思議し回し 方便して宜しきに随つて説きたもう

我が所有の福業 今世若しは過世

及び見佛の功德 盡く佛道に向向す

爾の時に舍利弗、佛に白して言さく、

世尊、我今復疑悔なし。親り佛前に於て阿耨多羅三藐三

菩提の記を受くることを得たり。是の諸の千二百の心自在な

る者昔學地に住せしに、佛常に教化して言わく、

我が法は能く生・老・病・死を離れて涅槃を究竟すと。是の

學・無學の人亦各 自ら我見及び有無の見等を離れたるを以

て、涅槃を得たりと謂えり。而るに今世尊の前に於て、未だ聞

かざる所を聞いて、皆疑惑に墮せり。善哉、世尊、願わくは四

衆の爲に其の因縁を説いて疑悔を離れしめたまえ。

爾の時に佛、舍利弗に告げたまわく、

我先に諸佛世尊の種種の因縁・譬諭・言辭を以て方便して法を

説きたもうは、皆阿耨多羅三藐三菩提の爲なりと言わずや。是

の諸の所説は皆菩薩を化せんが爲の故なり。然も舍利弗、今當

に復譬諭を以て更に此の義を明すべし。諸の智あらん者、譬諭

を以て解ることを得ん。

舍利弗、國邑聚落に大長者あらん。其の年衰邁して、財富

無量なり。多く田宅及び諸の僮僕あり。其の家廣大にして唯一

門あり。諸の人衆多くして一百・二百・乃至五百人、其の中に

止住せり。堂閣朽ち故り、牆壁頽れ落ち、柱根腐ち敗れ、

梁棟傾き危し。周而して俱時に歟然に火起つて舍宅を焚燒

す。長者の諸子、若しは十・二十・或は三十に至るまで、此の

宅の中にあり。長者是の大火の四面より起るを見て、即ち大

に驚怖して是の念を作さく、

我は能く此の所焼の門より安穩に出ずることを得たりと雖も、而も諸子等、火宅の内に於て嬉戯に樂著して、覺えず知らず驚かず怖じず。火來つて身を逼め苦痛己を切むれども心厭患せず。出でんと求むる意なし。

舍利弗、是の長者是の思惟を作さく、我身に力あり。當に衣械を以てや若しは几案を以てや、舍より之を出すべき。

復更に思惟すらく、是の舍は唯一門あり而も復狹小なり。諸子幼稚にして未だ識る所あらず、戲處に戀著せり。或は當に墮落して火に焼かるべし、我當に爲に怖畏の事を説くべし。此の舍已に焼く、宜しく時に疾く出でて火に燒害せられしむることなかるべし。

是の念を作し已つて、思惟する所の如く具に諸子に告ぐ。汝等速かに出でよと。

父憐愍して善言をもつて誘諭すと雖も、而も諸子等嬉戯に樂著し肯て信受せず、驚かず畏れず、了に出ずる心なし。亦復何者か是れ火、何者が爲れ舍、云何なるをか失うと爲すを知らず。但東西に走り戯れて父を視て已みぬ。爾の時に長者即ち是の念を作さく、

此の舍已に大火に焼かる。我及び諸子若し時に出でずんば必ず焚かれん。我今當に方便を設けて、諸子等をして斯の害を免るることを得せしむべし。

父諸子の先心に各好む所ある、種種の珍玩奇異の物には情必ず樂著せんと知つて、之に告げて言わく、汝等が玩好するところは希有にして得難し。汝若し取らざれば後に必ず憂悔せん。此の如き種種の羊車・鹿車・牛車、今門外にあり、以て遊戯すべし。汝等此の火宅より宜しく速かに出

で来るべし。汝が所欲に隨つて皆當に汝に與うべし。

爾の時に諸子、父の所説の珍玩の物を聞くに、其の願に適えるが故に、心各勇銳して互に相推排し、競うて共に馳走し、争うて火宅を出ず。是の時に長者、諸子等の安穩に出ずることを得て、皆四衢道の中の露地に於て坐して復障礙無く、其の心泰然として歡喜踊躍するを見る。時に諸子等各父に白して言さく、父先に許す所の玩好の具の羊車・鹿車・牛車、願わくは時に賜與したまえ。

舍利弗、爾の時に長者各諸子に等一の大車を賜う。其の車高廣にして衆寶莊校し、周市して欄楯あり。四面に鈴を懸け、又其の上に於て幟蓋を張り設け、亦珍奇の雜寶を以て之を嚴飾し、寶繩絞絡して諸の華瓔を垂れ、縮縫を重ね敷き丹枕を安置せり。駕するに白牛を以てす。膚色充潔に形體姝好にして大筋力あり。行歩平正にして其の疾きこと風の如し。又僕従多くして之を侍衛せり。所以は何ん、是の大長者財富無量にして、種種の庫藏悉く皆充溢せり。而も是の念を作さく、我が財物極まりなし。下劣の小車を以て諸子等に與うべからず。今此の幼童は皆是れ吾が子なり。愛するに偏黨なし。我是の如き七寶の大車あつて其の數無量なり。當に等心にして各各に之を與うべし、宜しく差別すべからず。所以は何ん、我が此の物を以て周く一國に給うとも、なお置しからじ。何に況んや諸子をや。是の時に諸子、各大車に乗つて未曾有なることを得るは、本の所望に非ざるが若し。舍利弗、汝が意に於て云何。是の長者、等しく諸子に珍寶の大車を與うること、寧ろ虚妄ありや不や。

舍利弗の言さく、不なり。世尊、是の長者、但諸子をして火難を免れ其の軀命を全うすることを得せしむとも、これ虚妄

に非ず。何を以ての故に、若し身命を全うすれば、便ち爲れ
 已に玩好の具を得たるなり。況んや復方便して彼の火宅より而も
 之を拔濟せるをや。世尊、若し是の長者、乃至最小の一車を與
 えざるも、猶お虚妄ならし。何を以ての故に、是の長者先に是
 の意を作さく、我方便を以て子をして出ずることを得せしめん
 と。是の因縁を以て虚妄なし。何に況んや、長者自ら財富無量
 なりと知つて、諸子を饒益せんと欲して等しく大車を與うるを
 や。

佛、舍利弗に告げたまわく、

善哉善哉、汝が所言の如し。舍利弗、如來も亦復是の如し。
 則ち爲れ一切世間の父なり。諸の怖畏・衰惱・憂患・無明・
 暗蔽に於て永く盡くして餘なし。而も悉く無量の知見・力・
 無所畏を成就し、大神力及び智慧力あつて、方便・智慧波羅蜜
 を具足す。大慈大悲常に懈倦なく、恒に善事を求めて一切を利益
 す。而も三界の朽ち故りたる火宅に生ずること、衆生の生・
 老・病・死・憂悲・苦惱・愚癡・暗蔽・三毒の火を度し、教化
 して阿耨多羅三藐三菩提を得せしめんが爲なり。諸の衆生を
 見るに生・老・病・死・憂悲・苦惱に燒煮せられ、亦五欲
 財利を以ての故に、種種の苦を受く。又貪著し追求するを以て
 の故に、現には衆苦を受け、後には地獄・畜生・餓鬼の苦を受
 く。若し天上に生れ及び人間に在つては貧窮困苦・愛別離苦・
 怨憎會苦、是の如き等の種種の諸苦あり。衆生其の中に歿在し
 て歡喜し遊戯して、覺えず知らず驚かず怖じず、亦厭うことを
 生さず解脱を求めず。此の三界の火宅に於て東西に馳走して、大
 苦に遭うと雖も以て患いとせず。舍利弗、佛此れを見已つて
 便ち是の念を作さく、我はこれ衆生の父なり。其の苦難を抜き
 無量無邊の佛智慧の樂を與え、其れをして遊戯せしむべし。

舍利弗、如來復是の念を作さく、

若し我但神力及び智慧力を以て、方便を捨てて、諸の衆生の爲に如來の知見・力・無所畏を讚めば、衆生是れを以て得度すること能わじ。所以は何ん、是の諸の衆生未だ生・老・病・死・憂悲・苦惱を免れずして、三界の火宅に焼かる。何に由つてか能く佛の智慧を解らん。舍利弗、彼の長者の復身に力ありと雖も而も之を用いず、但愍懃の方便を以て諸子の火宅の難を勉濟して、然うして後に各珍寶の大車を與うるが如く、如來も亦復是の如し。力・無所畏ありと雖も、而も之を用いず。但智慧方便を以て三界の火宅より衆生を拔濟せんとして、爲に三乗の聲聞・辟支佛・佛乘を説く。而も是の言を作さく、汝等樂つて三界の火宅に住することを得ること莫れ。麤弊の色・聲・香・味・觸を貪ること勿れ。若し貪著して愛を生ぜば、則ち爲れ焼かれなん。汝等速かに三界を出でて、當に三乗の聲聞・辟支佛・佛乘を得べし。我今汝が爲に此の事を保任す、終に虚しからじ。汝等但當に勤修精進すべし。如來是の方便を以て衆生を誘進す。復是の言を作さく、汝等當に知るべし、此の三乗の法は皆是れ聖の稱歎したもう所なり。自在無繫にして依求する所なし。是の三乗に乗じて、無漏の根・力・覺・道・禪定・解脱・三昧等を以て自ら娛樂して、便ち無量の安穩快樂を得べし。

舍利弗、若し衆生あり、内に智性あつて、佛世尊に従いたてまつりて法を聞いて信受し、愍懃に精進して速かに三界を出でんと欲して自ら涅槃を求むる、是れを聲聞乘と名く。彼の諸子の羊車を求むるを爲て火宅を出ずるが如し。

若し衆生あり、佛世尊に従いたてまつりて法を聞いて信受し、愍懃に精進して自然慧を求め、獨善寂を樂い、深く諸法の

因縁を知る、是れを辟支佛乗と名く。彼の諸子の鹿車を求むるを爲て火宅を出ずるが如し。

若し衆生あり、佛世尊に従いたてまつりて法を聞いて信受し、勤修精進して一切智・佛智・自然智・無師智・如來の知見・力・無所畏を求め、無量の衆生を愍念安樂し、天・人を利益し一切を度脱する、是れを大乘と名く。菩薩此の乗を求むるが故に名けて摩訶薩とす。彼の諸子の牛車を求むるを爲て火宅を出ずるが如し。

舍利弗、彼の長者の、諸子等の安穩に火宅を出ずることを得て無畏の處に到るを見て、自ら財富無量なることを惟うて、等しく大車を以て諸子に賜えるが如く、如來も亦復是の如し。これ一切衆生の父なり。若し無量億千の衆生の、佛教の門を以て三界の苦・怖畏の險道を出でて、涅槃の樂を得るを見ては、如來爾の時に便ち是の念を作さく、我無量無邊の智慧・力・無畏等の諸佛の法藏あり。是の諸の衆生は皆是れ我が子なり。等しく大乘を與うべし。人として獨滅度を得ることあらしめじ。皆如來の滅度を以て之を滅度せん。是の諸の衆生の三界を脱れたる者には、悉く諸佛の禪定・解脱等の娛樂の具を與う。皆是れ一相一種にして、聖の稱歎したもう所なり。能く淨妙第一の樂を生ず。

舍利弗、彼の長者の初め三車を以て諸子を誘引し、然して後に但大車の寶物莊嚴し安穩第一なるを與うるに、然も彼の長者に但大車の寶物莊嚴し安穩第一なるを與うるに、然も彼の長者虚妄の咎なきが如く、如來も亦復是の如し。虚妄あることなし。初め三乗を説いて衆生を引導し、然して後に但大乘を以て之を度脱す。何を以ての故に、如來は無量の智慧・力・無所畏・諸法の藏あつて、能く一切衆生に大乘の法を與う。但盡くして能く受けず。舍利弗、是の因縁を以て當に知るべし、諸佛方便力の

故に、一佛乘に於て分別して三と説きたもう。

佛重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

譬えば長者 一の大宅あらん

其の宅久しく故りて 復頓弊し

堂舎高く危く 柱根摧け朽ち

梁棟傾き斜み 基陸頽れ毀れ

牆壁圯れ坼け 泥塗褻け落ち

覆苦亂れ墜ち 椽椳差い脱け

周障屈曲して 雜穢充徧せり

五百人あつて 其の中に止住す

鷄・梟・鷓・鷓・鷓 烏・鵲・鳩・鴿

蚺蛇・蝮・蠍 蜈蚣・蚰蜒

守宮・百足 鼯・狸・鼯・鼠

諸の惡蟲の輩 交横馳走す

屎尿の臭き處 不淨流れ溢ち

蜚蝗・諸蟲 而も其の上に集まり

狐・狼・野干 咀嚼踐蹋し

死屍を齧齧して 骨肉狼藉し

是れに由つて群狗 競い來つて搏撮し

飢羸惴惶して 處處に食を求め

鬪諍擅擧し 嗥齶嗥吠す

其の舎の恐怖 變ずる狀是の如し

處處に皆 魑・魅・魍魎

夜叉・惡鬼あり 人肉

毒蟲の屬を食噉す 諸の惡禽獸

孚乳產生して 各自ら藏し護る

夜叉競い來り 争い取つて之を食す

之を食して既に飽きぬれば 悪心轉た熾んにして

鬪諍の聲 甚だ怖畏すべし

鳩槃荼鬼 土埵に蹲踞せり

或時は地を離ること 一尺二尺

往返遊行し 縦逸に嬉戲す

狗の兩足を捉つて 撲つて聲を失わしめ

脚を以て頸に加えて 狗を怖して自ら樂む

復諸鬼あり 其の身長大に

裸形黒瘦にして 常に其の中に住せり

大惡聲を發して 叫び呼んで食を求む

復諸鬼あり 其の咽鍼の如し

復諸鬼あり 首牛頭の如し

或は人の肉を食い 或は復狗を噉う

頭髮蓬亂し 殘害兇險なり

飢渴に逼まられて 叫喚馳走す

夜叉・餓鬼 諸の惡鳥獸

飢急にして四に向い 窓牖を闚い看る

是の如き諸難 恐畏無量なり

是の朽ち故りたる宅は 一人に屬せり

其の人近く出でて 未だ久しからざるの間

後に宅舎に 忽然に火起る

四面一時に 其の焰俱に熾んなり

棟梁椽柱 爆聲震裂し

摧折墮落し 牆壁崩れ倒る

諸の鬼神等 聲を揚げて大に叫ぶ

鷓鴣・鷲・諸鳥 鳩槃荼等

周樟惶怖して 自ら出ずること能わず

悪獣毒蟲 孔穴に藏竄し

毗舍闍鬼 亦其の中に住せり

福德薄きが故に 火に逼まられ

共に相殘害して 血を飲み 肉を噉う

野干の屬 竝に已に前に死す

諸の大惡獸 競い來つて食噉す

臭煙蓬焯して 四面に充塞す

蜈蚣・蚰蜒 毒蛇の類

火に焼かれ 争い走つて穴を出ず

鳩槃荼鬼 隨い取つて食う

又諸の餓鬼 頭上に火燃え

飢渴熱惱して 周樟し悶走す

其の宅是の如く 甚だ怖畏すべし

毒害火災 衆難一に非ず

是の時に宅主 門外に在つて立つて

有人の言うを聞く 汝が諸子等

先に遊戯せしに因つて 此の宅に來入し

稚小無知にして 歡娛樂著せり

長者聞き已つて 驚いて火宅に入る

方に宜しく救濟して 燒害なからしむべし

諸子に告諭して 衆の患難を説く

惡鬼・毒蟲 災火蔓延なり

衆苦次第に 相續して絶えず

毒蛇・蚘・蝮 及び諸の夜叉

鳩槃荼鬼 野干・狐・狗

鷓鴣・鷲・鷄・梟 百足の屬

飢渴の惱急にして 甚だ怖畏すべし

此の苦すら處し難し 況んや復大火をや
 諸子知ることなければ 父の誨を聞くと雖も
 なお樂著して 嬉戲すること已まず
 是の時に長者 而も是の念を作さく
 諸子此の如く 我が愁惱を益す
 今此の舍宅は 一の樂むべきなし
 而るに諸子等 嬉戲に耽湎して
 我が教を受けず 將に火に害せられんとす
 即便思惟して 諸の方便を設けて
 諸子等に告ぐ 我種種の
 珍玩の具 妙寶の好車あり
 羊車・鹿車 大牛の車なり
 今門外にあり 汝等出で來れ
 吾汝等が爲に 此の車を造作せり
 意の所樂に隨つて 以て遊戯すべし
 諸子 此の如き 諸の車を説くを聞いて
 即時に奔競し 馳走して出で
 空地に到つて 諸の苦難を離る
 長者子の 火宅を出ずることを得て
 四衢に住するを見て 師子の座に坐せり
 而して自ら慶んで言わく 我今快樂なり
 此の諸子等 生育すること甚だ難し
 愚小無知にして 險宅に入れり
 諸の毒蟲 魑魅多くして畏るべし
 大火猛焰 四面より俱に起れり
 而るに此の諸子 嬉戲に貪樂せり
 我已に之を救うて 難を脱るることを得せしめつ

是の故に諸人 我今快樂なり

爾の時に諸子 父の安坐せるを知つて

皆父の所に詣でて 父に白して言さく

願わくは我等に 三種の寶車を賜え

前に許したもう所の如き 諸子出で來れ

當に三車を以て 汝が所欲に隨うべしと

今正しく是れ時なり 唯給與を垂れたまえ

長者大に富んで 庫藏衆多なり

金・銀・瑠璃・碑磔・碼碯あり

衆の寶物を以て 諸の大車を造れり

莊校嚴飾し 周巾して欄楯あり

四面に鈴を懸け 金繩絞絡して

眞珠の羅網 其の上に張り施し

金華の諸纓 處處に垂れ下せり

衆綵雜飾し 周巾圍繞せり

柔軟の繪續 以て茵蓐と爲し

上妙の細氎 價直千億にして

鮮白淨潔なる 以て其の上を覆えり

大白牛あり 肥壯多力にして

形體姝好なり 以て寶車を駕せり

諸の僮從多くして 之を侍衛せり

是の妙車を以て 等しく諸子に賜う

諸子是の時 歡喜踊躍して

是の寶車に乗つて 四方に遊び

嬉戲快樂して 自在無礙ならんが如し

舍利弗に告ぐ 我も亦是の如し

衆聖の中の尊 世間の父なり

一切衆生は 皆是れ吾が子なり

深く世樂に著して 慧心あることなし

三界は安きことなし 猶お火宅の如し

衆苦充滿して 甚だ怖畏すべし

常に生・老・病・死の憂患あり

是の如き等の火 熾然として息まず

如來は已に 三界の火宅を離れて

寂然として閑居し 林野に安處せり

今此の三界は 皆是れ我が有なり

其の中の衆生は 悉く是れ吾が子なり

而も今此の處は 諸の患難多し

唯我一人のみ 能く救護を爲す

復教詔すと雖も 而も信受せず

諸の欲染に於て 貪著深きが故に

是を以て方便して 爲に三乘を説き

諸の衆生をして 三界の苦を知らしめ

出世間の道を 開示演説す

是の諸子等は 若し心決定しぬれば

三明及び 六神通を具足し

緣覺不退の 菩薩を得ることあり

汝舍利弗 我衆生の爲に

此の譬諭を以て 一佛乘を説く

汝等若し能く 是の語を信受せば

一切皆當に 佛道を成ずることを得べし

是の乘は微妙にして 清淨第一なり

諸の世間に於て 爲めて上あることなし

佛の悦可したもう所 一切衆生の

稱讚し 供養し禮拜すべき所なり
無量億千の 諸力・解脱
禪定・智慧 及び佛の餘の法あり
是の如き乘を得せしめて 諸子等をして
日夜劫數に 常に遊戲することを得
諸の菩薩 及び聲聞衆と
此の寶乘に乗じて 直に道場に至らしむ
是の因縁を以て 十方に諦かに求むるに
更に餘乘なし 佛の方便をば除く
舍利弗に告ぐ 汝諸人等は
皆是れ吾が子なり 我は則ち是れ父なり
汝等累劫に 衆苦に焼かる
我皆濟拔して 三界を出でしむ
我先に 汝等滅度すと説くと雖も
但生死を盡くして 而も實には滅せず
今作すべき所は 唯佛の智慧なり
若し菩薩あらば 是の衆の中に於て
能く一心に 諸佛の實法を聽け
諸佛世尊は 方便を以てしたもうと雖も
所化の衆生は 皆是れ菩薩なり
若し人小智にして 深く愛欲に著せる
此れ等を爲ての故に 苦諦を説きたもう
衆生心に喜んで 未曾有なることを得
佛の説きたもう苦諦は 眞實にして異なることなし
若し衆生あつて 苦の本を知らず
深く苦の因に著して 暫くも捨つること能わざる
是れ等を爲ての故に 方便して道を説きたもう

諸苦の所因は 貪欲これ本なり
 若し貪欲を滅すれば 依止する所なし
 諸苦を滅盡するを 第三の諦と名く
 滅諦の爲の故に 道を修行す
 諸の苦縛を離るるを 解脱を得と名く
 是の人何に於てか 而も解脱を得る
 但虚妄を離るるを 解脱を爲と名く
 其れ實には未だ 一切の解脱を得ず
 佛是の人は 未だ實に滅度せずと説きたもう
 斯の人未だ 無上道を得ざるが故に
 我が意にも 滅度に至らしめたりと欲わず
 我は爲れ法王 法に於て自在なり
 衆生を安穩ならしめんが故に 世に現ず
 汝舍利弗 我が此の法印は
 世間を利益せんと欲するを爲ての故に説く
 所遊の方に在つて 妄りに宣傳すること勿れ
 若し聞くこと有る者 隨喜し頂受せん
 當に知るべし是の人は 阿鞞跋致なり
 若し此の經法を 信受すること有らん者
 是の人は已に會て 過去の佛を見たてまつりて
 恭敬供養し 亦是の法を聞けるなり
 若し人能く 汝が所説を信すること有らんは
 即ち爲れ我を見 亦汝及び比丘僧
 並びに 諸の菩薩を見るなり 斯の法華經は
 深智の爲に説く 淺識は之を聞いて
 迷惑して解らず 一切の聲聞 及び辟支佛は
 此の經の中に於て 力及ばざる所なり

汝舍利弗 尙お此の經に於ては
信を以て入ることを得たり 況んや餘の聲聞をや
其餘の聲聞も 佛語を信ずるが故に
此の經に隨順す 己が智分に非ず
又舍利弗 憍慢・懈怠
我見を計する者には 此の經を説くことなかれ
凡夫の淺識 深く五欲に著せるは
聞くとも解すること能わじ 亦爲に説くことなかれ
若し人信ぜずして 此の經を毀謗せば
則ち一切世間の 佛種を斷ぜん
或は復顰蹙して 疑惑を懷かん
汝當に此の人の 罪報を説くを聽くべし
若しは佛の在世 若しは滅度の後に
其れ斯の如き 經典を誹謗することあらん
經を讀誦し 書持することあらん者を見て
輕賤憎嫉して 結恨を懷かん
此の人の罪報を 汝今復聽け
其の人命終して 阿鼻獄に入らん
一劫を具足して 劫盡きなば更生れん
是の如く展轉して 無數劫に至らん
地獄より出でては 當に畜生に墮つべし
若し狗・野干としては 其の形頹瘦し
鰥・疥癩にして 人に觸燒せられ
又復人に 惡み賤まれん
常に飢渴に困んで 骨肉枯竭せん
生きては楚毒を受け 死しては瓦石を被らん
佛種を斷ずるが故に 斯の罪報を受けん

若しは駝駝と作り 或は驢の中に生れて
 身に常に重きを負い 諸の杖捶を加えられん
 但水艸を念うて 餘は知る所なけん
 斯の經を謗するが故に 罪を獲ること是の如し
 有は野干と作つて 聚落に來入せば
 身體疥癩にして 又一目なからんに
 諸の童子に 打擲せられ
 諸の苦痛を受けて 或時は死を致さん
 此に於て死し已つて 更に隣身を受けん
 其の形長大にして 五百由旬ならん
 聾聵・無足にして 蜿轉腹行し
 諸の小蟲に 啜食せられて
 晝夜に苦を受くるに 休息あることなけん
 斯の經を謗するが故に 罪を獲ること是の如し
 若し人となることを得ては 諸根暗鈍にして
 矬陋・癡癡 盲聾・背偃ならん
 言説する所あらんに 人信受せじ
 口の氣常に臭く 鬼魅に著せられん
 貧窮下賤にして 人に使われ
 多病・瘠瘦にして 依怙する所なく
 人に親附すと雖も 人意に在かじ
 若し所得あらば 尋いで復忘失せん
 若し醫道を修して 方に順じて病を治せば
 更に他の疾を増し 或は復死を致さん
 若し自ら病あらば 人の救療することなく
 設い良藥を服すとも 而も復増劇せん
 若しは他の反逆し 抄劫し竊盜せん

是の如き等の罪 横ざまに其の殃に羅らん
斯の如き罪人は 永く佛
衆聖の王の 説法教化したもうを見たてまつらじ
斯の如き罪人は 常に難處に生れ
狂聾心亂にして 永く法を聞かじ
無數劫の 恒河沙の如きに於て
生れては 輒ち聾瘂にして 諸根不具ならん
常に地獄に處すること 園觀に遊ぶが如く
餘の惡道に在ること 己が舍宅の如く
駝・驢・猪・狗 是れ其の行處ならん
斯の經を謗するが故に 罪を獲ること是の如し
若し人と爲ることを得ては 聾・盲・瘖瘂にして
貧窮諸衰 以て自ら莊嚴し
水腫・乾疥 疥癩・癰疽
是の如き等の病 以て衣服と爲ん
身常に臭きに處して 垢穢不淨に
深く我見に著して 瞋恚を増益し
姪欲熾盛にして 禽獸を擇ばじ
斯の經を謗するが故に 罪を獲ること是の如し
舍利弗に告ぐ 斯の經を謗せん者
若し其の罪を説かんに 劫を窮むとも盡きじ
是の因縁を以て 我故に汝に語る
無智の人の中にして 此の經を説くことなけれ
若し利根にして 智慧明了に
多聞・強識にして 佛道を求むる者あらん
是の如きの人に 乃ち爲に説くべし
若し人會て 億百千の佛を見たてまつりて

諸の善本を植え 深心堅固ならん
是の如きの人に 乃ち爲に説くべし
若し人精進して 常に慈心を修し
身命を惜まざらん 乃ち爲に説くべし
若し人恭敬して 異心あることなく
諸の凡愚を離れて 獨山澤に處せん
是の如きの人に 乃ち爲に説くべし
又舍利弗 若し人あつて
悪知識を捨てて 善友に親近するを見ん
是の如きの人に 乃ち爲に説くべし
若し佛子の 持戒清潔なること
淨明珠の如くにして 大乘經を求むるを見ん
是の如きの人に 乃ち爲に説くべし
若し人瞋なく 質直柔軟にして
常に一切を愍み 諸佛を恭敬せん
是の如きの人に 乃ち爲に説くべし
復佛子 大衆の中に於て
清淨の心を以て 種種の因縁
譬諭・言辭をもつて 説法すること無礙なるあらん
是の如きの人に 乃ち爲に説くべし
若し比丘の 一切智の爲に
四方に法を求めて 合掌し頂受し
但樂つて 大乘經典を受持して
乃至 餘經の一偈をも受けざるあらん
是の如きの人に 乃ち爲に説くべし
人の至心に 佛舍利を求むるが如く
是の如く經を求め 得已つて頂受せん

其の人復 餘經を志求せず

亦未だ曾て 外道の典籍を念ぜじ

是の如きの人に 乃ち爲に説くべし

舍利弗に告ぐ 我是の相にして

佛道を求むる者を説かんに 劫を窮むとも盡きじ

是の如き等の人は 則ち能く信解せん

汝當に爲に 妙法華經を説くべし